

## チベットにおける巡礼と聖地に関する一考察

張 存徳<sup>※</sup>

チベット族はさまざまな目的で旅をする。たとえば、家畜の遊牧やキャラバン商業交易のために移動しなければならないが、これらの旅は経済的な目的と結びつけられている。親戚訪問の目的は血縁的な関係を深めるための感情連絡の一環である。そして聖地を目指す巡礼はチベット族の生活にもっと特別な意味をもつ。巡礼は精神的利益を最大に獲得する目的とするが、心と体の健康状態を保つことや、来世にまた人間に生まれ変わるという理想を実現するための聖なる旅である。チベットの巡礼を二大別すると、地方の小さな巡礼と中央の有名な巡礼がある。また、個人の巡礼と集団の巡礼もある。

以下に、チベット族の聖なる旅をめぐる、巡礼の原点や聖地の構造などを検討したい。

### 第一節 聖なる空間の構成と巡礼の意味

広大な草原では家畜が水草を求めて常に動いている。遊牧民は家畜の移動によって家としてのテントも移動する。人口の稀薄な荒野では、動かないのはチベットの寺院だけである。聖なる空間としての寺院は、いつでも安定していない移動生活をしている遊牧民にとってはふだんの生活の安定をもたらす、アクセントを与えている。寺院には多彩な仏像や六道<sup>〔一〕</sup>を描いた壁画などがあり、ラマ僧は日常生活の相談役になる。また、ラマ教寺院には巡礼者の信念を实践するため大小不等のマニ車や札押に欠かせないいろいろな施設が完備されている。

筆者の調査によると、マニ車はチベット仏  
※愛知大学大学院文学研究科

教寺院には必ず備えられるもので、オム・マ・ニ・ペメ・フム六字妙号が美しいデザインで刻まれていて、一回まわすごとに一回読経したことになるというものである。これらのマニ車はチベット族がいつでも片手に握って揺り動かしている「マニ車」より大きい。寺院にはたくさんのマニ車があり、またサイズも大きいからその中に入れた経文も多いというわけで、それらを回せばたくさん功德が積まれる。チベット族の寺院巡礼の楽しみはそこにもある。実に、マニ車を回すのが一種の娯楽のようである。そして、マニ車を回すことからチベット族の論理的傾向、また抽象性の愛好がみられる。それが寺院社会だけでなく、民衆の間にも影響を及ぼしている。チベット族自身の語るところによると、書物は仏像よりももっと神聖だと考えられている。何故かという仏像はただ念想の目的であるにすぎないが、書物はわれわれに教えを授けてくれるからであるという。個人の図書館は通常三三〇卷<sup>〔二〕</sup>以上ある仏典叢書よりなるという。チベットのラマ教寺院の場合には仏像も安置してあるが、本堂の両側に容量の上では巨大な大蔵経を天井の両側に安置している。そこに多分に呪術性がまといついていることであろう。すなわち經典を安置し崇拜するならば、功德があるという思想である。だいたいチベット族は經典はもちろん、字の書いてある紙は仏の字の書いてあるものと神聖視し、決して鼻紙や包装紙にせず、特に經典は破れても決して無闇に捨てず、また大地に経文の破れた紙切れでも、落ちていれば拾いあげて、必ず焼くか仏塔の裏か、マニ筒の下に經典のは

んばものを収集する特定の場所があって、そこに捨てており、字の書いてある紙はとてども丁重に取り扱う習慣がある。字の書いてある紙を乱用すると罰があたると考えている。

チベットでは山岳の路傍や草原の小高い丘に、石を積み重ねて「オボ」を作り、さらに小さな切石から自然の大石まで、大小さまざまなラマ教の教文が彫られている。チベットの高地を行く人々は道中の安全を祈願して右回りに巡って歩く。とくにチベット中を通じて、至るところで唱えられ、また岩角など至るところで刻せられているのは観音の呪語「オム・マ・ニ・ペ・メ・フム」である。「オム・マ・ニ・ペ・メ・フム」という六文字は「蓮華にある宝珠に幸あれ」という意味である。チベット族は旅に出かけるときには必ず経典をもって出かけるが、それは道中安穩のためなのである<sup>[三]</sup>。

筆者が見たところによると、村落や「オボ」などの至るところには赤・青・黄・白のタルチョと呼ばれる旗が立てられ、布にはラマ教の経文や多くの神々の姿が版木で押されている。タルチョーが風の吹くたびにどよめくばかりの旗音を立てて翻っていた。神々への祈りをこめた天空への交信でもあるという。これらの旗の前で、巡礼者がいつまでも五体投地の礼拝を繰り返している。タルチョを風になびかせれば、死者の霊をなだめ、願いごとがすべてかなえられるという。こうした路傍に、また山野にひっそりとつくられた祈りの場は、一つの生活区域の中にそれを数えることが不可能なほど無数に存在する。

青海省の首都西寧の南のほど遠からぬ所に位置しているのが、有名な日月山（赤嶺）—太陽と月の山である。唐の皇女文成公主が長安からラサへ旅した時、彼女は生家の光景を見ることのできる鏡を携えていったという話がある。しかし、途上、彼女は鏡を割ってしまい、これが日月山に変わった。このことが起こると、皇女は生家を思うことをあきらめ、

まっすぐチベットに向かった。そのあと、文成公主を記念する大きな石碑が建てられたほか、直径五、六メートルほどの石塚のまわりに、柵があり、周囲には経文を書いた白や黄色の祈りの旗、タルチョー（経文を書いた祈りの旗）が張りめぐらされている。テントを支えるロープのような感じで網が何本も張られていて、その網にはびっしりと経文旗がくくりつけられている。このタルチョーが一度風になびけば一度読経したことになる、とラマ教徒は信じている。行人が通過するとまた新しい石を積み上げ、自分の信仰心を示すのである。

伝説によると、文成公主がチベットに入る時に、峠や水たまりのところに至ると石を積み上げて記念とし、また後の通行人に道に迷わないように案内するために、そういう石塚は道しるべとされているが、以後、マニ石（経文が彫られた石）を積み上げることに移り変わった<sup>[四]</sup>。こういう石塚はちょうど交通の要所や峠のところにあり、巡礼者は通過するときに大小不等の石や六字真言を刻んでいる石を積み上げ、時計回りに石塚をまわる。これらの石塚の体積の増減、あるいは、新たな石塚の誕生や古い石塚の消失は交通量の消長と走向の変遷を示す。天幕の稀少な荒野では、こういう石塚は絶好な道標であった。今日に至っても、マニ石塚は道標の作用も失っていない。今もこの道は巡礼道なのである。最も大きなマニ石塚は約二十五億個マニ石があるといわれているが<sup>[五]</sup>、その巨大なマニ石塚は青海省玉樹藏族自治州玉樹県新村の嘉那にある。チベットの村々の入口には必ずマニ石、仏塔（チョルテン）、経文旗（タルチョー）がある。人々は旅に出る時には、そこで留守家族の無事と自らの旅先での安全を祈る。

チベットでは所々に聖山をめぐる巡礼もみられるが、最大の聖山をめぐる巡礼はカイラス巡礼である。チベット文化圏の人々にとって精神的原郷でもあるこのカイラス山への巡礼は、今でも決して衰えることなくつづけら

れている。チベット族にカン・リンポチェ峰（大きな氷の宝石）として知られるカイラス山（標高六六五六メートル）は、チベット西部のマナサロワル湖近くの牧草地にそびえ立つ。雪におおわれた頂をもち、古来ヒンズー教徒、チベットの原始的ボン教徒、また仏教徒にとって聖山である。危険に満ちた有名な巡礼路が山麓一帯をめぐっている。文革のあと、聖山巡礼は昔日の活況を取り戻している。巡礼者のうちある者はヤクや羊の群を伴ってチベット高原を流浪しつつ聖地に辿り着き、ある者はラサからトラックの便乗をまじえて聖地に向かう。いずれにしろ、長期にわたる彼らの道中の多くは、乞食行によって辛うじて支えられている。そのように、巡礼者の出身地や階層はいろいろでも、彼らが異口同音に語る巡礼の目的は「来世のために徳を積むこと」である。

聖山めぐりの基地であるタルチェンに到着した巡礼者は、昼夜兼行でカイラス山一周を三日に一度くらいのペースで繰り返す、多くはその目標回数を十三回に定めているという。しかもその十三めぐりのうちの少なくとも一回だけは、全行程を五体投地で進むのを念願とし、そのため衣服の膝や袖の部分をすり切らせ、額に血をにじませた巡礼者を見ることもまれではない。「三途の脱れ坂」でなされた懺悔滅罪のための行が、この場合には全行程にわたる五体投地という、いわば〈歩く〉ことを極限にまで押しすすめた苦行にグレードアップされるのである。そればかりではなく、チベット高原の各地では、カイラス山一周の巡礼路にいたる遙か手前からでも、五体投地を繰り返しながら聖山をめざす巡礼者の姿が少なくないという。大地に全身を打ちつけながら進む巡礼者の礼拝とは、釈迦牟尼仏の身体に等しいチベットの大地に対し己れの五体をあげて懺悔し、滅罪を願うことにほかならない。キャンチャと呼ばれるこの五体投地の礼拝で、巡礼者はまず両手を頭上で合掌し、

「この身体をつくりしこれまでの罪を清めたまえ」と祈り、ついでその両手を顔の前で合わせ、「この口がこれまでにつくりし罪を清めたまえ」と祈り、さらに両手を胸の前で合わせ「この心がこれまでにつくりし罪を清めたまえ」と祈る<sup>[六]</sup>。身口意の三業が犯した一切の罪のゆるしのためには、その代償としてこれほどまでに凄まじい肉体的痛苦が必要だと観念されているわけである。

チベット族は聖なるもののいろいろな顕現様式に直面してある不安を感じず。われわれはすなわちある種の人間にとって聖なるものが山や峠、あるいは石の中に顕われ得る、ということが理解し難いのである。しかしわれわれはまもなく、それが山そのものの崇拜、あるいは石そのものの信仰を意味するのではないことを知るであろう。聖なる山、聖なる峠、聖なる石は山としてあるいは石として崇拜されるのではない。それが崇拜されるのは、それが聖体示現であるからであり、もはや山や石ではなく、かの聖なるもの、全く別なものである何かを示しているからである。どんなに原始的なものでも聖体示現はすべて背理を示すということは、いかに強調してもしすぎることはない。聖なるものを啓示することによって、事物はある全く別のものとなるが、しかしその後も依然としてその事物であることに変わりはない。というのも、その後も宇宙的環境世界に關与しているからである。聖なる石といえども依然として一個の石である。つまり見かけは（正確にいえば、世俗の観点からは）それをほかのすべての石から区別する何物もない。しかし、石が聖なるものとして啓示される人々にとっては、眼前の石の現実が超自然的な現実になる。言い換えれば、宗教的経験をもつ人間にとっては、全自然が宇宙的な神聖性として啓示されえる。その時、宇宙は全体が聖体示現となるのである。

チベット社会の人間は、聖なるものの中で、あるいは清められた事物のすぐそばで生活し

ようと努める。この傾向はもっともなこととして理解される、というのもチベット族およびチベット語諸種族の社会にとって、聖なるものは力であり、究極的にはとりも直さず実在そのものを意味するからである。聖なるものは実在として浄化された空間と時間に充ちている。聖なる力は実在と永遠性と造力とを同時に意味する。聖と俗との対照はしばしば現実と非現実あるいは偽の現実との対照としてあらわれる。存在し、実在にあやかり、力に充ち満ちてあることを宗教的人間が熱望する所以もこのゆえに理解される。

チベット自治区の色拉(セラ)寺、哲蚌(ドレパン)寺、甘丹(ガンデン)寺、扎什倫布(タシルンポ)寺、甘肅省の拉卜楞(ラブレン)寺、青海省の塔爾(タルー)寺は実に大巡礼地でもなっている。チベット族の人たちはこれらの寺院に参拝するのが生涯の願いである。どこのラマ教寺院でも、マニ車を片手にした巡礼者たちが群がっているのは、チャンパ・ハカン、弥勒殿である。五十六億七千万年の後、この世に出現して一切衆生を苦しみから解き放すという未来仏チャンパ(弥勒)の前にひときわ高く揺めくバター灯油は絶えることない。これらの寺院へいつ行って見てもひたすら五体投地礼を繰り返す人々が絶えない。これらの大巡礼地に至る大動脈こそ、高度なインド文明や中国文明をチベットに導入するパイプラインとなった。また同時に、その動脈から毛細血管のように張り巡らされた大小無数の巡礼路を通して、チベットの文化的統一体が確立されることになった。すなわち、チベット族の社会における共同の思考、生活様式、習慣、祭礼といったものが次第に定着したことがみられる。そして、仏教の思想に影響され、滅罪懺悔の意識が強く、さらに輪廻転生と関わっていることというのも巡礼に行く重要な動機でもある。今日でも、チベット文化の本質に近づき、その魂を肌で感じるのがやはり五体投地の礼拝を交えながら歩き

つづいている巡礼であろう。チベットの巡礼に関する諸考察を行うのはチベット文化への理解を深めることになる。

## 第二節 健康と病気をめぐって巡礼の原点を求める

(一) チベットにおける健康と疾病およびその医療システム

チベットは春夏秋冬の四季を楽しむことのできる自然ではなく、人間を威圧し、たえず目に見えない恐ろしさをもって迫ってくる自然である。自然が人間を敵対的に支配することになると、自然界の諸事象はそれぞれ何らかの精霊または妖気に支配されていると考える。ラマ教はもともと呪術の尊重とか、シャーマニズム的要素があった。ここにボン教が成立した。前述したように、仏教が伝わる以前から、チベット族の間ではボン教という原始宗教が行なわれていた。このボン教はもと中央アジアまた北方アジアに発生したシャーマン教の一種であって、民族の移動とともにチベットに伝えられたものと思われる。したがって、ボン教はチベット化したシャーマン教である。それは原始的な精霊崇拝を行っている<sup>[7]</sup>。

チベット族の健康脅威になるのはそれらの精霊と妖怪であったと考えられる。神々および悪霊は仏教以前のボン教に由来するが、後には仏教信仰の守護神と解せられるに至った。これらの神々や悪霊がある特定の人につくと考えられる。そこでチベット族は結婚・旅行・新生児の運命や健康について、このような特定の人、易断僧に伺いを立てる。するとその人は眼は血走り、口は泡を吹き、わけのわからない語を発するが、それが後に占星天文図に照らし合わせて解釈される。チベット族がどのような動機で巡礼をし始めたのかをより理解するために、ここではチベット仏教医学の治療法について述べる。

チベット族の治療儀礼は世界創造神話と、

蛇の怒りによる病気の発生，人間に必要な薬剤を与えた最初のシャーマンの出現を扱う別の神話とを讀誦（どくじゅ）する儀式から成り立っている。ほとんどすべての祭儀が，その初め，世界がまだ成立していなかったかの神話の時を呼び出す。その初め，天が日月星辰および国土がまだ存在せず，何物もまだ成り出てこなかったときになどと唱える。宇宙の開闢と蛇の出現がそれに続き，「天が現われ，日月などが成り出で，大地が広がり，山や谷や木や岩が現われ出た時……その時もろもろのナーガと竜が成り出た」などと詠む。それから最初の治療者の誕生，薬剤の出現を物語る。その際に薬剤の起源を説明しなければ，それについて語ることは許されない」と付け加える<sup>[1]</sup>この魔術的な治療歌において注目すべき重要な事実は，薬剤の起源に関する神話が常に宇宙開闢神話のなかに編入されていることである。周知のように自然民の治療法においては，患者の面前で儀礼的な薬剤の起源を復唱して始めてその薬剤が効力を発揮する。

吐蕃王国の成立したソンツェンガンポの時代ではチベットに中国仏教とインド仏教が入り，両者の交流の発端となり，チベット仏教のもとを築いている。ソンツェンガンポはまた大臣を中国，インドに派遣し，僧を迎え，チベット文字・文典の制定，仏典のチベット語訳をさせている。その中に，医学の経典もあった。七世紀以来今日まではチベット医学は仏教の文脈の中でのみ見出されている。仏陀は薬師如来として顕現したという。薬物治療，各種の理学療法（金鍼術，灸術，マッサージ術，行動療法），瞑想などの心理療法や，呪術的な医療を含んだ系統的なチベット医学が成立した<sup>[2]</sup>。

## （二）チベットの医療システムの普遍的性格

すでに前章で述べたように，チベット族が信奉するチベット仏教すなわちラマ教は，仏教の三宝とされる仏・法・僧の上にラマを加

え四宝とされるが，チベット高原の各地に生活を営んでいる大多数のモンゴル族やトウ（土）族はチベット族と共にこの教えに深く帰依している。筆者の調査に基づいて，青海省の塔爾（タルー）寺を一例として，ラマ教寺院が果たす役目の一部を扱って見てみよう。ラマ僧は教徒に勤める主な仕事有二つある。一つは読経，一つは医療である。これらの仕事はラマと活仏の個人収入の主要な来源である。チベットではチベット族やモンゴル族やトウ（土）族は人生の通過儀礼，たとえば，出生，結婚，葬儀などや，部落の有事の時，たとえば，悪天候の自然災害があった場合や，伝染病があった場合にも必ずラマ僧と活仏が頼まれ読経する。読経の儀式が済むと，ラマ僧と活仏が信者から布施をもらえるが，一般に言えば，活仏の布施が普通のラマ僧より数倍くらいもらえる。医療技術は，塔爾寺の医学部（曼巴扎倉〈マンバザツォ〉）<sup>[3]</sup>でチベット医学，医療や採薬を専門的に勉強する。中国の漢方医学とインド医学から重要な要素を融合させて，生成したのがチベットの独特な医療システムである。祈禱と医療を併せて施す診療方法なので，往々奇特な治療効果が得られる。診断方法は脈診，舌診，糞尿検査などで行うが，治療方法は鍼灸，投薬，薬浴，放血（指か耳から血を出す）などを用いている。薬物は植物，動物，鉱物など三大類あり，それらを混じって粉末にしたものや丸薬になったものもある。またその薬の中にチベット高原では特有の薬物も使われている。たとえば，雪蓮はチベットの薬草の中でも秘薬中の秘薬といわれている霊薬である。雪蓮は高い山の頂きに自生している花で，ふだんは雪の中に深く埋まっているが，一年の内雪の消えた夏の一時だけその姿を見ることができる。診断した後，調製した薬物を患者に飲ませる前に，まずラマ僧が読経する。その薬も患者が特効霊薬を視される。脈診は患者との関係を取り結び，感情移入するための方策として必

ず用いられる。脈診によって、身体の不調の最も深い原因を霊的に見極めるための基本的な手段である。まじないがもつ治療の効力はそれを儀礼的に唱え、世界の起源および疾病とその治療の起源を含めた神話的な起源の時が現前するところにあると思われる。病人に対する脈診や治療や投薬、そして読経をすることなどすべてをラマ医一人で行う。医療費も安いからたくさんの人がそれらを受けるのである。病気が治ったら神仏のお陰だと思われ、感謝の気持ちで礼拝に行き、多くの布施を持っていく場合もある。このように、チベットの寺院は医療システムを支配し、治療者と患者や患者の家族の間では治療者に対する支払いが経済的な問題として患者にとって重要であるが、病気の責任の決定に関しては仏法的形式で関与している。

チベット医学は仏教医学として重要な構成をなしている。仏教の伝来とともに、医学、易学、天文学なども入って、土着のボン教と融合して、祈禱や薬治療と結合し、病人を癒やすことなどの靈験があったということだと思ふ。チベット族は病魔なるものがあって人間の身体を侵すのだと考えている。だから病気にかかる、まず易僧の占いを請い、病魔を払うためには神仏に祈禱し、盛んに供養する。御釈迦様・阿弥陀仏二尊に限らず、大日如来・薬師仏をはじめ広く十方に在す諸仏・菩薩に祈念するのみならず、天神地神に祈り、百魔諸竜をも崇拜し幸福にあずかろうとする。ラマ教の神殿には仏も魔も併せ祀られている。チベット医学の目的が、ほかのすべての医学体系と同じく、人間をその肉体的痛苦から救うことにあることはいうまでもない。この医学体系においては、身体に存在する三体液である「風」、「胆汁」、「粘液」のバランスを回復することによって、健康に引き戻すのである<sup>[一]</sup>。人の（精神的）気質がかなりの程度まで、身体の機能や緊張や疲労、そのほかの身体の諸活動に影響を与え、また決定

していることは間違いない。心は身体を支配し、心が我々の苦しみや幸せを作り出すのである。心は主人であり、身体と言語はその従者である。医の技術と医学の修養は主に身体の病気を治すことを目指しているわけであるが、チベット医は精神力の修養・開発と道徳の遵守にも同じだけの重みを置く。チベット族にとって仏教の思想と道徳そして仏教心理学は、意識をコントロールして暴走しないようにする有効な方法を豊富に提供してくれるものである。身体の苦痛を取り去るために医学的な治療法が処方され、意識（心）の修正には生き方の指針であるダルマ（法）が処方される。この二つは密接に関わっている。これらの方法を用いて、精神と肉体の平安をもたらすのである。

このような霊性的な治療に関する記録も歴代の旅行記には少なくない。山口慧海の『チベット旅行記』には「チベットでは病気になる、妙な風習があつて、まず医者頼みに行かなく、始めに神降ろしを頼む。すると神降がどこかの医者がよいとか、どういふ薬がよいとか」と書かれている<sup>[一]</sup>。また、多田等観の書物にも「チベットの病気を癒すために寺院内にラマ医は居るけれども、僧徒に病人が出来た時、それに診察を受ける者はあまり見受けない。日頃信仰している功德のラマのもとに本人が行くか、または使を派して、ラマは早速骰子（さいころ）を振って占い、……その数によって法の如く判断する」と記載されている<sup>[一三]</sup>。

中国のチベット学研究者の李安宅氏の実地調査によると<sup>[一四]</sup>、チベットでは病気になった人は医薬の治療を受けるが、巫術や宗教の世話にもなる。チベットのラマは医者資格で診察し、僧侶資格で病人にお経をあげる。多数の場合に多くのラマが病人に読経をする。病人は病気が重くなればなるほど、また金がたくさんあればあるほどおおぜいのラマを頼んで、たくさんのお経をあげる。チベット族

の治療方法ははるかに特殊な方法であり、病人の病気が重くなればなるほど、病人を寝かささない。このように病人が完全な休息をとれなくなると、ある程度の治療効果を得られるというわけで、多くの病人が重体から救われる。

現在、チベットの僧医としてヒマラヤ山脈地帯に活躍している大工原弥太郎氏の著書『明るいチベット医学』はチベット族の病人と巡礼のことについてふれているが、上述の内容と似ている。チベット族はガンにかかった時、ラマにこれからどうしたらいいのでしょうか」と聞きにいて、ラマは「何も考えずにお祈りの生活をしよう」とか、「巡礼に行け」とかいう。それで、巡礼に行ったりするが、帰ってくると、案外よくなったり、長生きすることがある」という<sup>〔一五〕</sup>。

巡礼の生活というのはほんの少しのツェンバを食べて、肉も酒もタバコもやらず、寝て起きて、そして、毎日歩いてぎりぎりまで体力を使う。そして、自分自身の苦しみの救済だけでなく、人のために祈るといふ巡礼の生活を続けている。生き延びようとか、苦しみから逃げられたいとか、自分自身のためでなく、素直に祈りの行をして、巡礼を達成しようという気持ちが身体にリズムをつくっている。このように、巡礼の旅を続けている。「末期を告げられて巡礼に行き、帰ってからも五年、十年とけっこう長生きしている人も少なくない」<sup>〔一六〕</sup>ということから、チベット族はこれが仏の利益だと思っている。チベット族の健康と病気に対する信条と実践はチベット文化の重要な構成要素である。

筆者の調査によると、チベット族の疾病に関する信条と行為は、土着文化の発達から生み出されたものと、仏教医学と結合したものである。総じて、チベット医学は宗教、魔術、医療が密接に結びついている。心理的、また精神的な効果が大きい。チベットでは健康と病気は生物学的現象であると同様に社会的文

化的現象でもあるという事実である。チベット族の保健需要は聖地への巡礼によって満足されている。しかも、科学が移入されると、病気になる人々は呪術僧に頼らないで、医者のところへ行く。伝統的な信条と行為は現代医療の導入と矛盾を起した時に、両方とも何もかもうまくゆく方法で行動する。したがって、ラマ僧がまっ先に病院へ治療を受けにゆく。そこで呪術信仰は近代医療に便乗している。占師は病人に「人民病院へ行くには今日は吉日だ」というふうに教える。また、入院中の患者には異常な状態が繰り返す場合や、薬はまったくに効かない場合、「土着の方法を使ってやってみたらどうでしょう」といわれる病院の医者もいる。これらは土着信仰と科学的治療とを和解するためにとられた方法だといっている。

### (三) チベット族の医療行為と医療観そして巡礼

チベット仏教では大乘・小乗・密教の一切がすべて仏陀の教えとして説かれている。チベット医学でも、仏陀とか薬師如来が医学書とか医学用のタンカに登場する。そのため医学も仏陀の存在したインドから伝えられ、チベットに根づいたとする。チベット医学は千年以上前にインドから入った生物学や科学を基礎に発展してきたというが、それ以前にベルシャ地方から入ったゾロアスター教の医療にも、大きな影響を受けたとされている。特に、チベット医学における薬剤は独特で、薬草のほかに、銀や鉛、動物の角、皮、内臓、貝の化石、花粉、宝石を破碎した粉など、ありとあらゆる自然界の物質が使用される。チベット医薬には疾病の治療に特効がある薬物だけではなく、健康を保つ保健医薬まである。このようにチベットにおける健康観は必ずラマ教寺院とラマ医の間に神秘的につながっている。そして、疾病観はチベット社会において魔術と宗教とに非常に密接に関係しており、

これらを分離するのは不可能である。チベットの神話は宇宙観と病をもたらすと考えられている超自然的な神々やほかの存在を説明するのに重要な役割を果たしていると思われる。チベットの社会的制度も治療者の役割や治療者と患者や家族との関係に反映している。

筆者の調査によると、チベット族は元気と病気の現象が神霊のたたりと結びづけていると信じていて、健康を保つことと病気を癒やすことにおいて、神々の加護と助けが必要であると考えている。したがって、チベット族の人々は神々の世界と接触するためにその寺院への巡礼を繰り返している。というのは、部分的にも理論面での動機づけによるものである。なぜかという、チベット寺院では単に魔術のような祈禱法を使うだけではなく、生物学的な理論知識を身につけたラマ医は、適応な薬も与えることによって、痛みを止めるからである。このように病気を癒して元気になることは神仏のおかげだと信じられる。それによると、ラマ教徒の医療観や医療行為はすべての文化において重要なカテゴリーとなっているので、政治、経済、社会、宗教などほかのすべてに対すると同様の観点が、健康に関する観点に対しても向けられることを要求している。

ラマ医は種々の疾病の発生における要因を知っていて、人間行動を誘導して心理的精神的な作用で医療を得られる。だいたい医学が発達している寺院には有名なラマ医（活仏）がいるために、大勢の人々はそこへ向け巡礼に行くが、また、多くの人々の病気を治療した情報が幅広く広がっていく。このようなことによって、もっと大勢の人々が集まってくる。そして、巡礼者はたくさんの布施をすることによって、寺院経済も壮大になる。これはチベットがラマ教によって三〇〇年間ほど統治された重要な理由である。たといラマ医の治療を受けて治らない場合でも、決してラマ医のせいではなく、その人の天命であるから

仕方がないと考えられている。そして、寺院の要求があれば、死者の家族は喜んで死体を寺院に捧げる。これは、また両方とも喜ばれることである。そうすると、寺院では病因を究明するために死体を解剖するが、バラバラの死体をラマの読経声中に鳥に食べさせる。いわゆるチベットではもっとも一般的な葬儀—「鳥葬」である。チベットでは鳥葬するのはたくさんの金がかかるが、寺院に死体を捧げると金がかからない。これは貧しい家にとっては非常に経済的である。ラマの読経によって鳥葬を行うのが普通であるので、ラマに布施をしなければならない。それで、寺院は無料で簡単に死体を入手できて、詳しい事情を検査する。このように、寺院のラマ医は多くの死体の解剖によって、人間の健康と病気に関する生物学的科学的な認知を得た。これを基礎にして、寺院はまた宗教学的な手段を通して、人々の健康と病気を一手で握っていた。そして、ラマ教徒の健康改善を進めようと考え出したのは保健行動としての巡礼である。巡礼は寺院の医学的な状況に啓発され、健康との関連性により現れた社会的文化的現象だと筆者が思っている。

そういう前提のもとに、巡礼が発生してきているから、巡礼そのものがチベットではどういふ動機で行われるかという、まず第一にはやはり現世利益があると考えられる。たとえば、貸切トラックが毎日ラサに向かって、各地から巡礼が出ている。ガンの重症患者であるとか、そういう人々は病気を治してもらうために「薬水」（神薬）を飲んでくる。このようなことによって、チベットの疾病と文化と人間の行動との関係はみられる。ある聖地へ目指す理由のひとつは、あそこは医療システムの概念とも関わっているのである。そして、チベットの巡礼には病気を癒すということが巡礼の起源と深く関わっていると思う。

筆者の考えによると、医療はどの時代でも支配的文化の特性の精妙で鋭敏な指標である。



なぜなら、病の脅威と現実を目の前にした人間の行動は、彼ら自身と彼らの世界観から形作られた考え方に必然に基づいているからである。チベットの文化には、支配的世界観と分離不能な相互関係を持っている医療システムを発達させてきた。ラマ教寺院は健康に関する知識、技術を獲得し、それらを仏教の輪廻転生やボン教のシャーマニズム呪術と密接に結びつけ、社会全体のラマ教信者の健康水準を左右し、社会の最適機能を促進する。個人のまた集団の医療行動は全体的文化の歴史を離れては理解不能である。今でも、巡礼者の中には癒病神や疾病を癒やす神のところへ向いて巡礼する信者も絶えないが、理由においては巡礼者が目指した聖地は保健や医療の中心地であるからと考えられる。すでに述べたように、ラマ教の場合、医療神としてのラマが登場してくる。ラマも原始宗教としてのボン教における巫師（シャーマン）と同じである。ラマのところへ行行って、そして祈りによって癒やされる。それがラマ教の巡礼の始まりといってもいいであろう。ラマというと徳の高い人であるが、ラマが医師神の代わりなのである。チベット族はそういうラマ（上師）を活仏といい、活仏への巡礼から、ラマ教の巡礼は始まったと思われる。

したがって、チベット族にとっては巡礼が一種の宗教儀礼であり、聖地巡礼は信仰の実践と保健需要とが結びつけられている。仏教にきわめて敬虔なチベット族にとって、「聖地巡礼」、つまり自分の生まれた土地から有名な寺院や聖山まで五体投地の礼拝を繰り返しながら移動して辿り着くことは無病息災、功德圓滿になり、最高の喜びを得られることである。このため毎年のように広大なチベット高原のどこかで聖地を目指してひたすら五体投地の旅を続ける団体が必ず数多くみられる。巡礼者の中では何ヶ月もかけて五体投地の旅を続けている人々もいる。チベット族の健康と病気に対する考え方は社会的文化に基づい

て、形成した民族的な習慣である。

筆者の調査によると、チベット族の巡礼にはほかの民族と似た類型がある。巡礼の組織からいうと、基本的には集団的な巡礼と個人的な巡礼（家族ぐるみも含む）がある。巡礼の様式からいえば、聖山や聖湖や寺院などの聖地の外郭をめぐる円周型と自分の故郷から特定の聖地まで五体投地の礼拝をしながら前進する直線型がある。巡礼の根本形態は遠方の聖地に赴くというところにある。巡礼は居住地である日常空間、俗空間を一時離脱して非日常空間、聖空間に入り、そこで聖なるものに近接・接触し、そのあと、再びもとの日常空間、俗空間に復帰する行動である。そこで重要になってくるのが巡礼路の問題である。チベットにおいて巡礼路は社会的・経済的重要性をもっている。巡礼路の成立はそれ以前の通商上のロード・ネットワークを前提としていたし、巡礼路の完成は大量の物質と情報の伝達交流を可能にしたのである。また、有名な寺院の所在地は同時に有名な政治・経済の中心地でもある。チベット族の巡礼は文化交流や交易促進などに大きな影響を与えた。巡礼の往路は精神的緊張と期待が満ちているのに対して、復路はたとえ往路と同一のルートを戻るとしても、それは安堵感と満足感が優先する場合が多い。復路にしばしば娯楽的要素が加わるのもそのためであると思われる。しかし、この視点にもとづく民俗的な研究はまだ行われていない。これは今後の課題にしたい。

## 注

[一] 衆生がそれぞれの業によって生死、輪廻する地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天六つの世界のこと。六道を輪廻転生という、一般に六つの世界を同一平面上に車輪のごとくめぐるとか、あるいは螺旋状に上昇・下降すると考えられ、一種の宇宙観をなしている。しかし、この宇

- 宙はそれぞれ人の心の状態を示している。  
この宇宙を壁画の形式で表している。
- [二] 『大藏経』が三三〇巻になるが、一般的には『大藏経』が揃われているということである。
- [三] 中村元『東洋人の思惟方法4』中村元選集第4巻，春秋社，昭和四一年。
- [四] 青海公路交通史編委会編『青海公路交通史』第一冊，人民交通出版社，一九八九年。原載：徐玄生「青海の歴史古跡」『西北論衡』六巻六期，民国二七年三月三〇日版。
- [五] 中国少数民族民俗大辞典編集『中国少数民族民俗大辞典』内蒙古人民出版社，一九九四年。
- [六] 玉村和彦『聖山巡礼』山と溪谷社，一九八七年。
- [七] 前掲書 [三]。
- [八] J. F. Rock, The Na-Khi Naga cult and Related Ceremonies (Rom 1952), Bd. I, p. 279ff.
- [九] トム・ダマー著／久保博嗣・井村宏次『チベット医学入門』春秋社，一九九五年。
- [一〇] 青海省編集組『青海藏族蒙古族社会歴史調査』青海人民出版社，一九八五年。
- [一一] 前掲書 [九]。
- [一二] 山口慧海『チベット旅行記』白水社，一九六七年。
- [一三] 多田等観『チベット』岩波書店，一九八二年。
- [一四] 李安宅『藏族宗教史之实地研究』中国蔵学出版社，一九八九年。
- [一五] 大工原弥太郎『明るいチベット医学』情報センター出版局，一九九五年。
- [一六] 前掲書 [一五]。

## 新刊紹介

### 日本順益台湾原住民研究会編 『台湾原住民研究』第1号

日本の若手研究者による台湾原住民に関する文化人類学的調査資料や論考の発表の場として、「社会で得たものは、社会に還元する」を理念とする順益台湾原住民博物館の助成のもとに発足した研究会の会誌である。社会の大きな変動の渦の中に在って、過去の資料と現存の聞き取り資料を有機的に結び付け確実な記録を残すことが第一の目的であると創刊の辞で代表の末成道男氏がその意図を述べている。また、創刊号はこの方面で大きな業績を上げられてきた、王崧興・姫野翠両教授の追悼にスペースが割かれ、笠原政治、土田滋、末成道男、森口恒一、清水純、小西正捷氏により両教授の人と学問が偲ばれている。

内容は論文として山路勝彦「文明の解逅と平

埔族の漢化」、野林厚志「ヤミ族の社会生活についての予備的調査と今後の課題」、土田滋「シラヤ語人称代名詞—李壬癸教授著『高雄縣における原住民の言語』刊行に寄せて—」、資料として江田明彦編「随観抄記（伊能嘉矩著）」、清水純「クヴァラン族、トルビアワン族の伝承」からなり、会誌の今後の方向性を示したものとなっている。会誌とは別に同研究会から台湾原住民研究資料叢書として、リボク著／馬淵悟編『リボク日記』（B5判，254頁）がすでに刊行されており、両者を合わせての刊行は斯界に一石を投じることになるであろう。なお、研究会は東京大学東洋文化研究所を所在・連絡先としている。（佐野賢治）

A5判 231頁 1996年 5月刊